



統計と創造

田中 厚
亀田総合病院皮膚科部長

慢性の痒みを抑える薬が次々と上市され、数年前から皮膚科外来診療は急にとっても楽になった。戸倉新樹先生も以前からおっしゃっておられたが、Type2炎症性の疾患はいろいろとあるので、今後は、長い間辛い思いをした痒みを伴う慢性疾患や、木村氏病のような厄介な疾患の多くの患者さんもずっと楽に過ごせるようになるだろうし、場合によっては水疱性類天疱瘡でももっと副作用の少ない治療法が選択肢に入るかもしれない。また、アトピー性皮膚炎と結節性痒疹と多形慢性痒疹は、どんな間柄の疾患なのだろうか。共通点と相違点は何か。それと、Type2炎症を短期間抑えるだけなら、大きな問題は多分生じないだろうか……。

先日、自動車税を払うのに“〇〇pay”でQRコードを使って支払ったら、ものの10秒ほどで全作業が終了したのは絶句した。コンピュータやその先のAIは、本当に便利で凄い。これはこれでどこまでも進歩してほしい。しかしフレディ・マーキュリーが「音楽には、いい音楽と悪い音楽しかない」といった、そのいい音楽が、現在までコンピュータやAIでつくられたためしはない。AIでもいい音楽や絵画はいつかつくれるのか？ 診察室での患者さんとの対応や会話、そのほんの微かな呼吸はAIでコントロール可能か？ それともまだAIがつくれない、いい音楽や絵画、文学側の問題なのか。確かに接遇の仕方には、いろんな心理学を応用したアプローチが細々となされている。しかし本当の

機微は、患者さんが診察室に入ってきて最初の数分、言葉やあるいは言葉以外の何かでかなり決まってしまう、そのほとんどが、音楽、絵画、文学など芸術側の問題である、ということはないであろうか。統計学とか歴史学とか心理学と、本当に研ぎ澄まされた芸術や数学などは、まったく異なるものだ。そして誰でもその違いはわかるから、“いい音楽”が売れるのである。患者さんの心は、芸術側にあるような気がする。とはいえ医学、統計学ももちろん大事である。

2年前、「突然のお知らせですが、私 〇〇は●●の全身転移のため、本日不帰の旅に出かけました。(……医学的な精確で明晰な記録が続くが中略……)『つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを』 在原業平 伊勢物語 を口ずさみながら旅立ちました……」。

その2年前まで、外来をやっていただいていた先生から亡くなる当日、奥様の手で小生あてに投函いただいた手紙であった。享年87。医学は永遠であり、芸術は、死を前提にする。その間に、患者さんが揺れ動いている。いつの日か、統計やAIと、独創や美が、もっと接近する日を夢みて。